

“破脚骨”

“破脚骨”——Phacahkueh のように読む、はわれわれの田舎の方言で、つまり“無頼漢”である。王桐齡教授の『東遊雜感』の筆法によれば、次のように言うことができる。——破脚骨は官話では無頼と曰い、光棍と曰う、古語では潑皮と曰い、破落戸と曰い、上海では流氓と曰い、南京では流戸と曰い、青皮と曰い、日本ではゴロツキと曰い、イギリスではラグと曰う……。この名詞の本意はあまり明瞭ではなく、望文生義的に見ればたぶんいつも殴られて脚の骨を折るから、そういうふうにするのだろう。彼等の職業は騙り、俗に敲竹杠と称する。小破脚骨は通りをうろついて鴨を探し、だませる人間を見るとつかかかっていく。つかかかれた人が何か言うと、彼はたちまちどなりかけ、Tao-wan baangwaantatze? と曰う。意味は、つかかかったらいかんのかということ、そこでからみついて放さない、グルになった人間が出て来て茶館に迎えて評定し、結果はぶつかられた方が間違っているということになり、みんなの勘定を持って一件落着となる。これはごくふつうのやり方で、この他にまだたくさんあるが、わたしもあまりよく知らない。大破脚骨となるともっぱら大口の商売をやる。たとえば娼婦の請負い、賭博の親や姦通者の捕縛やゆすりなどで、もうあつた小さな悪事はやらない。彼らのやり口は少し“破靴党”に近く、ちがうのは連中が秀才ではないという点だけだ。

こういう連中は当然よい人間ではなく、定論をひっくり返す文章を書くのが好きな人でもなかなか連中をよく言えない。しかし、彼らにも取るべきところはある。彼らにも自分たちの道徳があり、義と勇を重んずる。たとい同じ仲間ではなくとも、酒楼や茶館で一二度顔を合せただけで、情が通じたということになり、もうだまし討ちはしないし、時にはかばいさえする。わたしが江南に往って水兵になる前に、弟と田舎でぶらぶら遊んでいた時は、大いに破脚骨にしけ込んだ気味があり、近隣の小破脚骨何人かと識合いになったが、遠縁の破靴党は仲間とはならなかった。われわれはそのため人からぶち当たられたことがなかったし、一二度など確かに連中のおかげを蒙った。一度わたしはすでに家に居なかったが、弟（その時彼は十四五でしかなかった）が母と南街に芝居を見に行つた。そのころはまだ芝居小屋などなく、ただ廟の舞台で神を敬う芝居を演じるのだったが、近場の人が両側に見物席を組んで人に貸出した。われわれも二人分の座席料を払って借りたのだが、後になって見物席の主人がなぜか急にお払いのおふれを出した。たぶん金持ちに貸そうとしたのだろう。見物客はたちまち大いに困つた。うまい具合にわれわれの顔見識の小破脚骨がちょうどそこで芝居を見ていたので、彼をつかまえて来た。彼は見物席の主人に、「あんたはこの席を貸さないんだな。そんなら俺が貸出そう。」と言つた。見物席の主人はおふれを撤回したほかに、彼に対して相当の心付けまで出して、ようやく事は収まつた。彼のこの無理無体の詭弁には、実に少なからぬユーモアと愛嬌が含まれている。二十世紀以来二度と彼に会つたことはない。聞くところでは彼は後に目しひになって、何年かして世を去つたということだ——どうか永遠に安らかにお休み！

人が破脚骨になろうとするには、相当の訓練が要る。古代の武士の修業と同じように、とても
の事ではない。破脚骨の生活で最も重要な事は殴られることである。だから十分な忍苦忍辱の勇

気がなければ、一丁前の破脚骨には成れない。小破脚骨が人とけんかをすると、罵りながら着物を脱ぎ、右手でそれぞれ敵の弁髪を抜き左手でそれぞれその髪の毛の根元を握る。そこで互に推しあい、路傍に押されて背中を壁に押しつけられたものが負けとなる。大破脚骨はそうではない。彼は合口を抜くが、決して人を刺さず、ただ手に持っているだけで、自らその股を指して、“刺してみろ！”と言う、相手が言う通り刺すと、又命じて“もう一度刺せ！”と言う。再三刺されても少しも痛いとは言わない。刺した者がひるんで同じように言いつけ通りにしなくなると、大敗ということになって、もう同類に顔向けできなくなる。殴打に耐えられることを、隠語で“路足を受ける”と言って、破脚骨の修養の最も重要な一である。この他役所の経験も重要で、彼らは往々にして茶館で大言壮語して、“尻も打たれたし、首枷もはめられた”と言うが、これも破脚骨の履歴の中では出色の項目なのだ。大家の子弟で落ちぶれて破脚骨になる者があるが、家柄の影響で、官刑の心配がないから、この二項の修練は必要がないかもしれないが、ただ殴られるのはもとより必要である。わたしに一人同族の長輩がいて、文に通じ、二尺四方の大字も書けたのが、破脚骨になり、ある年の春分の日宗廟の中で彼がその戦功を自慢するのを聞いた。Tarngfan yir banchir, banchir yir tarngfan と言った、意味は打倒されると又はい起き、はい起きると又打倒されるということで、この二句は実際“破脚骨道”の精義を表わすに足る。いま人心は古ならざる時代に、破脚骨も墮落して、開港場のゆすりのゴロツキになり変った。昔日の郷間の破脚骨を回想すると、すでに書中の列仙高士のごとしで、流風は断絶して、はるか遠くまた追うべからざるなりである。

わたしは父方の伯父の戦功を黙想して思わず「キホーテ先生」(Don Quixote——林琴南先生は当块克非替ダンクワイクフエイテイと訳し、陸祖鼎先生は唐克孝タンクシヤオと訳し、丁初我先生は二十年前に唐夸特タンクワトと訳された)、それにスペインの“悪漢小説”(Novelas de Picaros)を想い出した。中国にもこうした人物はいるのに、なぜ『水滸伝』の浣皮牛二以外に、誰も連中を細かく描こうとする人はいない。でなければほんとうに“ゴロツキ生活の文学”(Picaresque Liteature)が出来あがるのに。——この二つの英語を、陸先生は『学灯』で“盗賊文学”と訳された。ああ、軽い枷と杖の罪名がついにこうして大辟〔死刑〕に改定されてしまったのは、(治盗条例が現行している時期では)冤なるかな枉なりである。しかしながらこれも陸先生を責めることはできない。『英漢字典』には確かに“流氓”(Picaroon)という言葉をもとに劫掠者、盗賊等々と解釈してあるからだ。(民国十三年六月)

※初出：1924年6月18日『晨报副刊』